届いた願い

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
届いた願い

【Ｎコード】
Ｎ５０３９Ｉ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
優子はバイクを愛する恋人走輔の身の上が心配だった。その彼に占い師から貰ったお守りをプレゼントして。ある人達がゲスト出演しています。

第一章

届いた願い

古屋走輔の趣味はバイクだ。いつも時間があればバイクを飛ばしている。とにかくバイクに乗ることが好きで十六になってすぐに免許を取ってそれからずっと乗っている。

アルバイトもバイクに乗れるからという理由でピザの配達にした。学校に行くのも勿論バイクでとにかくバイクがないと駄目な男だった。

その彼にも恋人がいる。名前は村岡優子という。黒髪を長く伸ばした細い女の子であり垂れている目は大きくはっきりしていてその光は優しい。口は小さく細面で眉は目に従うようにやはり垂れている。何処か困ったような表情をいつも浮かべていた。背は高いがそれは女の子としてであり一八〇を超えている走輔よりは小さい。そんな女の子だった。彼とは高校一年ではじめて同じクラスになりそれが縁で大学に入ってからも付き合っているのである。

二人の仲はとてもよかった。相思相愛と言ってもいい。だが優子には心配事が一つあった。

「ねえ走輔」

「何だよ、またあれかよ」

「ええ」

「ったくよ、いいじゃねえかよ」

彼はその長身を少し曲げるようにして優子に対するのが常だった。目は小さく眉は曲がっている。髪は茶色にしていて耳を覆わせている。顔は背に比べてかなり小さい。鼻は日本人にしては高めで口は淡いピンク色である。身体はバイクに乗っているだけあって引き締まっている。

「だからバイクはさ、俺の」

「生きがいだっていうのね」

「ああ、そうさ」
ここでいつも胸を張って言うのだった。
「バイクがないと俺はだめなんだよ。それはもうわかってるだろ？」
「それはわかってるわ」
優子は彼の言葉に俯いてしまって答える。これも常だった。
「それは。けれど」
「気をつけろっていうんだろ？」
「バイクって。車に比べて危険だから」
俗に言われていることだ。確かにそういう一面もあるものだ。
「だからね。あまり飛ばさないで欲しいし周りもよく見て」
「バイクは飛ばすものだぜ」
しかし彼はいつも彼女の言葉にこう返すのだった。
「もうよ。風を切ってさ」
「それでもよ」
しかし優子はそれでも言うのだった。これも常だった。
「気をつけて。御願いだから」
「親父さんやお袋さんみたいになって欲しくないからだっていうんだな」
「ええ」
そしてここでこくりと頷くのも優子だった。
「だからね。それは御願い」
「わかったさ。じゃあな」
「お父さんもお母さんもバイクに乗っていて」
彼女の両親もバイクに乗っていたのだ。
「カーブで対向車にぶつかってね」
「ああ、それな」
走輔もカーブでの危険さはよくわかっているのだった。
「カーブはとにかく危ないんだよな」
「走輔街道レースもやってるじゃない」
彼の趣味の一つであるのだ。彼は休日にはよく街道を走っている。

その為その筋ではかなり名前を知られた男でもあるのだ。その速さと度胸で。
「だから余計に」
「わかってるさ。そりゃ親父さんやお袋さんのことはな」
走輔もここでまた俯くのだった。
「わかってるけれどよ」
「それでもバイクはなのね」
「どうしてもな。わかってくれよ」
「けれど本当によ」
優子の言葉はしつこくさえあった。どうしても走輔のことが心配だったのだ。
「気をつけてよね」
「わかったさ。本当にな」
こんなやり取りをいつも続けていた。しかし走輔は優子のこの言葉を疎ましいとは思っていても彼女は好きだった。心優しく誰にでも公平な彼女の心のよさを知っていたからだ。
そして彼女も走輔の一本気で嘘のない性格が好きだった。二人はいつも一緒にいたし優子はバイクにこそ乗らなかったが彼と一緒にいつもいたのだった。
そんなある日のこと。優子は学校から帰っていた。そこでふと一人の男に呼び止められたのだ。
「もし」
「はい？」
顔を向ければそこにいたのは青いスーツの男だった。白い、裏地が赤のコートをその上に羽織っている。スーツの襟から見えるカッターは白でネクタイは赤だ。髪は黒くそれで顔の左半分を隠している。涼しげでかつ端整な顔をした痩せ身で長身の男だった。
「貴女のことですが」
「私ですか？」
「まず私のことですが」

次に男は自分のことを名乗ってきた。
「占い師でして」
「占い師の人ですか」
「はい。速水といいます」
こう名乗ってきたのだった。
「速水丈太郎といいます」
「速水さんですか」
「はい。宜しければ名前を覚えていて下さい」
優子にこうも告げてきた。
「宜しいでしょうか」
「はい、速水さんですね」
優子は彼の言葉に応えて頷く。とりあえずは、であった。

第二章

「わかりました。占い師の」
「そうです。見たところ貴女は」
次に優子の顔をその右目で覗くように見てきた。女の子としては長身の優子よりもまだ頭一つ高い。それにとても整った穏やかな顔をしていた。
「一つ災厄に襲われようとしています」
「災厄ですか？」
「そうです。災厄です」
こう優子に述べるのだった。
「それも貴女ではなく」
「私ではなく、ですか」
「その通りです。貴女を以前襲った不幸」
「不幸・・・・・・まさか」
以前襲った不幸と聞いてであった。優子の顔が一気に曇ったのだ。
「それって」
「それは貴女が最も御存知だと思いますが」
「はい」
その曇った顔で頷く優子だった。
「わかります。それは」
「そうですね。これがその証拠です」
速水は言いながらコートの中ポケットに右手を入れそこから何かを出してきた。見ればそれは一枚のカードであった。優子はそのカードに描かれている絵柄を見て言った。
「タロットですか」
「私の占いはこれです」
速水はまた彼女に述べたのだった。
「タロットでして」

「そうですか。そしてそれは」
「今は極めて危険です」
見ればそのカードは塔だった。タロットカードの中で最悪のカードといわれている。バベルの塔のことと言われ破滅を意味する非常に厄介なカードである。
「そして」
「そして？」
「もう一枚ですが」
言いながらまたカードを出してきた。今度は髑髏が描かれている。大鎌を持ち不吉なものをそこから漂わせているように見えた。
「おわかりですね」
「・・・・・・死ですか」
「このままでは貴女にとって最悪の不幸が訪れます」
「不幸・・・・・・」
「それが運命です」
速水はここであえて運命という言葉を出したかのようだった。
「貴女を待つこれからの運命です」
「そんな、それじゃあ」
「運命からは逃げられません」
速水の言葉が厳然たるものになった。
「決して」
「そんな。じゃあ走輔は」
つい彼の名前を出してしまった。彼のことであるのは最早言うまでもなかった。
「走輔は・・・・・・」
「運命です」
速水の言葉は厳然なままであった。
「これがです」
「私、そんなの認めません」
運命と言われてもだった。それは彼女にとっては到底受け入れら

れないことであった。だからこう言うのも彼女にとっては当然のことだった。
「絶対に」
「絶対にですね」
「お父さんとお母さんもいなくなって」
泣きそうな顔になっていた。
「それで今度は走輔までなんて。絶対に」
「それが貴女のお考えなのですね」
「そうです」
優子は泣きそうな顔をしていてもそれでも毅然として言葉を出した。
「絶対に。それは」
「その言葉に偽りはありませんね」
ここで速水の言葉が変わってきた。
「それで」
「はい、そうです」
これまでよりも強い言葉であった。

第三章

「絶対に。変わりません」
「わかりました」
速水はその言葉を聞いて頷いた。そうして今度はコートの右のポケットに手を入れた。そうしてそこからあるものを出してきたのだった。
「それは」
「ブレスレットです」
「そうですよね」
「はい、その通りです」
見ればそうだった。七色のブレスレットであった。彼が優子に対して差し出してきたのはその不思議な色のブレスレットなのだった。
「これを貴女の大切な人に渡して下さい」
「これをですか？」
「運命から逃げることはできません」
また言う速水だった。
「ですが」
「ですが？」
「変えることはできます」
速水の言葉が優しいものになっていた。
「ですから。これを貴女の大切な人にどうぞ」
「いいんですか？」
「はい、是非共」
顔も微笑んでいた。その流麗な口元に笑みがあった。
「お渡し下さい、その人に」
「けれど私」
「お金はいりません」
優子が言うより前の言葉だった。

「さあ。ですから」
「わかりました」
速水がここでさらに差し出したその手の中にあるものを遂に受け取った。そうしてそのうえで強い言葉で言うのだった。
「その言葉、信じさせてもらいます」
「そうですか」
「いきなり言われて驚いているのも確かですけれど」
信じるのには難しいものもあるのも確かだった。しかし優子には速水が嘘を言っているようには見えなかった。その右目の奥を見てのことだ。
「それでも。今は信じさせてもらいます」
「有り難い御言葉です」
そして速水は優子のその言葉を受けて微笑むのだった。
「その御言葉こそが占い師にとってはです」
「有り難いのですか」
「占い師は信じてもらうことにその存在の意味があります」
そしてこうも言うのだった。
「だからです」
「そうなんですか。信じてもらってこそですか」
「その通りです。それでは宜しいですね」
「はい」
あらためて速水の言葉に対して頷いたのだった。
「このブレスレットを貴女の大切な人に」
「それで彼が助かるんなら」
「お金はいりませんので」
「いらないんですね、本当に」
「私の好意ですから」
穏やかで品のある笑みだった。やはり優しい。
「どうぞ」
「有り難うございます。それでは」

優子もそのブレスレットを受け取った。すると速水はまた彼に言ってきたのだった。
「運命は変えることができるのですよ」
「変えられるんですね、本当に」
「そうです。ですからお使い下さい」
速水の言葉は続く。
「是非共」
「わかりました」
こうして彼はそのブレスレットを受け取ってそのうえで走輔にそのブレスレットを手渡した。そのブレスレットを受け取った彼は微妙な顔を見せた。
「ブレスレットがかよ」
「ええ、いつも身体につけていて」
優子は真剣な顔で彼に告げていた。
「いつもね。いいわね」
「いつもかよ」
「最低でもバイクを運転する時はね」
このことを言う時程彼女の言葉が強くなったことはなかった。
「つけていて。御願いだから」
「それはいいけれどよ」
走輔は実際にそのブレスレットを右手に付けてみた。丁度合っている感じだ。しかし彼はそのブレスレットをつけてみてどうにも微妙な顔をしていた。

第四章

「何かな。これってよ」
「どうかしたの？」
「いや、何かな」
彼は言うのだった。
「不思議な感じがするな」
「不思議な感じって何かあるの？」
「これって普通のブレスレットだよな」
「そうだけれど」
占い師に貰ったといってもだ。彼女は御守りに思っていた。それをそう思いながらそのうえでまた彼に対して言うのであった。
「御守りだと思って」
「御守りか」
「だから最低でもバイクに乗る時はね」
そしてまたこのことを彼に話す。
「つけていてね。御願いだからね」
「そうだな。御前はバイクには絶対に乗らないからな」
「ああ。だから私と思って余計に」
「わかったよ、優子」
ブレスレットに顔を向けての言葉だった。
「それじゃあ。有り難くな」
「頼んだわよ、絶対に」
「それはわかったけれどよ。ちょっとな」
「ちょっと？」
「どうなんだよ。心配し過ぎじゃないのか？」
首を傾げながら優子に言うのだった。
「ちょっとな。幾ら何でも」
「そう思ってもらってもいいから」

優子にとってはそうだったのだ。彼女にとっては走輔はかけがえのない存在だった。だからこそ何としても失いたくなかった。それでこうまで言ったのだ。
「だから。絶対にね」
「よし、じゃあ本当にいつも身につけておくな」
走輔は今自分の心にも誓ったのだった。
「それ、約束するぜ」
「本当によ。絶対にね」
「ああ、絶対にな」
走輔は彼女の言葉にも誓った。そうしてそのうえでブレスレットを常に身につけるようになった。それから暫く経ったある休日。走輔は山道にいた。右手が岩山で左手が海のそこは急斜面とカーブが続く複雑な道だった。彼は今そこをレース仲間と一緒にいた。
「おい、何かやばいな」
「そうだな」
バイクスーツ姿の面々が上を見上げて言っていた。
「今にも降りそうだな」
「今日は晴れだったんじゃなかったのかよ」
「もうすぐ終わるか？それじゃあ」
「おい、何言ってるんだよ」
しかしここで走輔がその仲間達に言うのだった。彼は赤いバイクスーツである。体型がはっきりとわかる実に格好のいいスーツ姿だった。
「まだこれからじゃねえかよ」
「これからか」
「そうだよ、これからだよ」
彼は仲間達と同じく上を見上げていたがそれでも平気な顔をしていた。
「これから。レースはよ」
「雨でもやるのかよ」

「マジかよ、それ」
「マジに決まってるだろ」
彼の返事は彼の中では決まっていることだった。
「こんなので止めてどうするんだよ、一体」
「いや、このコースはかなりやばいからよ」
「止めた方がいいだろ、やっぱり」
「だよな」
仲間達は曇った顔で彼に告げるのだった。
「事故とか起こしたらそれこそな」
「海に落ちるか」
ここで皆その海を見る。そこはまさに崖でその下に青い海が白い波を立てていた。その青は空が曇ってきたせいか不気味な鉛の色になってきていた。
「それか岩にぶつかってな」
「終わりだぜ」
岩は暗灰色だ。それを見てもやはり不吉なものがある。彼等は天候が悪くなってきたせいかどうにも不吉な考えにもなってきていたのだ。
「やばいだろ、もうな」
「雨だとどうしてもスピードも出ないしな」
「じゃあこれで最後にするか？」
走輔は周りがあまりにも消極的なので遂に憮然としながらも折れた。

第五章

「それならよ」
「ああ、そうしようぜ」
「命知らずもいいけれどな」
　それを伊達にして走っているというのが街道レーサーだからだ。しかしそれでも極端な無茶は幾らその彼等でも流石にしないのだった。
「ある程度は慎重にいこうぜ」
「そういうことでな」
「わかったぜ。それじゃあな」
　まだ憮然としていたがそれでも彼等の言葉に頷いた。そうしてそのうえで今自分のバイクに乗る。そうしてそのうえで最後の走りに出た。暫くは天気も何もなく順調だった。
　ところがだった。急に雨が降ってきてそれは土砂降りになった。ヘルメットの視界は最早碌に前さえ見えない程にまでなってしまった。
「くっ、まずいな」
　彼もこの事態には戸惑った。
「このままじゃ本当に」
　止まろうかと思った。急ブレーキはあまりにも危険なので少しずつスピードを落としていく。幸いこの道は何度も走っているので道はわかっていた。それで僅かに残っている視界からも見ながらそのうえでスピードを落としていく。しかしここで、であった。
　タイヤがスリップした。その雨にとられてしまったのだった。
　バランスを取り戻すことはできなかった。そのまま派手に転倒しバイクから放り出されてしまった。この時彼は何もかもが終わったと思った。
「まずい、優子・・・・・・」

その時に優子の優しい笑顔が瞼に浮かんだ。そのまま彼女との思い出が映し出されようとしていた。
その日の夜だった。家にいた優子に電話がかかってきた。それは。
「えっ、走輔が！？」
電話で話を聞いた瞬間顔が蒼白になった。速水の言葉を思い出さずにはいられなかった。そうしてそのうえですぐに病院に向かったのだった。
病院にいたのは走輔だった。彼は幸いにして無事だった。頭に包帯を巻いているがそれでもだった。彼は特に目立った怪我もなくベッドにいた。
「よお、優子」
「走輔、大丈夫だったの」
「いやな、洒落にならない状況だったけれどな」
笑いながら優子に話してきたのだった。
「転倒してな。岩に真正面からぶつかってな」
「岩になの」
「その後で弾き返されてガードレールにも当たったしな。もう少しで死ぬところだったよ」
「よくそれで無事だったわね」
優子は少し話を聞いてそう思うのだった。
「岩にぶつかってそこからガードレールにはじき返されたっていうのに」
「頭はぶつけたぜ」
今度はその頭の包帯を指差してみせる。確かにそこには包帯がある。
「ちゃんとな」
「ちゃんとって言うの？それって」
「まあそう言ってくれよ。とにかくな、傷ってこれだけだったんだよ」
脳天気なまでに明るい笑顔だった。

「凄いだろ。普通死ぬような状況だったけれどな」
「けれど無事だったのは」
「ああ、これのおかげだな」
笑いながら今度は右手を見せてきた。そこにあるのはあのブレスレットだ。優子が走輔にあげた虹色のそのブレスレットを見せてきたのである。
「御前がくれたこのな。ブレスレットが守ってくれたんだろうな」
「そう。それじゃあやっぱり」
「実は信じてなかったんだよ」
能天気な笑みに少し苦いものが入った。
「けれどな。こうやって助けてもらったからな」
「信じてくれるのね」
「信じるさ。助かったからな」
だからだというのだ。やはり実際にそうなったということはかなり大きかった。
「有り難うな、優子」
「ええ。よかったわ、本当に」
二人は笑顔で話していた。走輔は無事だった、そしてそれを病室で喜び合っていたのだ。

第六章

その病室を病院の外から見上げている男がいた。それは彼だった。
「よかったですね」
優子達がそこにいるのをはっきりとわかっての言葉だった。
「大切な人が助かって。それで」
「相変わらずね」
その彼の後ろに妖艶な女が現われた。黒く長い髪を上で束ねてそれで後ろでまとめてうなじを見せている。目は切れ長の奥二重で黒い目が冷たい光を放っている。顔は細長く白い。そして唇は小さく紅の色をしている。黒いスーツにズボン、ネクタイは赤だ。背は高く大きな胸に長い脚がそのスーツからもはっきりと見えていた。その彼女が彼の後ろに現われてそのうえで声をかけてきたのだった。
「そうして人に情を忘れないのは」
「助かる命だっただけです」
速水は彼女にこう述べたのだった。
「私はそれだけです」
「それだけなのね」
「貴女もそうしたと思いますが」
速水は彼女に顔を向けてこう返してきたのだった。
「松本沙耶香さん。そうではないですか」
「私はそんな人間じゃないわ」
名前を言われた沙耶香はうっすらと笑って彼に告げた。
「気が向かないと何もしないわ」
「何もですか」
「そうよ、何もね」
こう言う沙耶香だった。口では。
「気が向かないとね」
「では気が向かれたら？」

「ひょっとするかもね」
うっすらと笑いながらまた言うのであった。
「その時はね」
「そして必ず気が向く」
速水はその彼女にさらに話す。
「私はそう見ていますが」
「そうかも知れないわ。それにしてもあの娘は」
「御気に召されましたか？」
「好みではあるけれど抱きはしないは」
それはしないというのであった。
「あれだけ一途だとね」
「おや。人の奥さんでも喜んで篭絡する貴女がですか」
「私が抱くのはあくまで相手に隙がある場合」
そうした場合だけだというのである。
「あそこまで一途な娘は抱かないわよ」
「そうですか」
「無理強いはしないから」
それが沙耶香の流儀だったのだ。彼女が抱く相手はそこに彼女が入り込む余地がある場合だけである。そうでない場合には全く動かないのである。
「だからよ」
「それもまた貴女らしい」
速水はそんな彼女を賞賛してみせてきた。
「ですから私は」
「悪いけれど今は貴方には気が向かないわ」
また微笑んでの言葉だった。
「そのうち。気が向けばね」
「ではその時を待ちましょう」
速水もまた微笑んで彼女の言葉に返した。
「その時にまた」

「気長に待つことね。では私は」
「何処に行かれるのですか？」
「その隙のある娘を見つけたわ」
見れば口元に笑みを浮かべている彼女の視線の先には一人の美しい看護士がいた。まだ看護士になったばかりのような初々しい娘であった。
「ああした娘もまた美味しいものよ」
「やれやれ、貴女も相変わらずですね」
こうは言ってもやはり沙耶香を認めている言葉の響きだった。
「お好きなようで」
「好きよ。女の子だけでなく男もね」
どちらもだというのだった。
「けれど今は女の子をね。食べたいわ」
「左様ですか」
「それにしても。あの二人は幸せになれるわ」
沙耶香もここで上を見上げた。そうしてそのうえでその病室の窓を見るのだった。
「貴方のおかげでね」
「それならば私は満足です。それで」
そんな二人の幸せに笑みを浮かべる速水だった。そして懐から出されたカードが何かというと。
それは恋人だった。彼はそのカードを見てさらに満足気な顔になるのだった。

届いた願い　　完

２００９・６・１５

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5039i/

届いた願い

2010年10月8日15時26分発行